

オリンピックスポーツ文化研究
2019.6 No.4 207—215

研究報告
(研究プロジェクト)

メダリストへの軌跡 —鶴見修治 選手—

波多腰 克 晃 (スポーツ哲学研究室)
神 田 俊 平 (スポーツ文化・社会科学系)
大河原 裕 迪 (スポーツ文化学群)

【経歴】

1953年 國學院高等学校
1956年 日本体育大学 体育学部 体育学科入学
1960年 日本体育大学助手
1965年 日本体育大学専任講師
1966年 株式会社河合楽器製作所入社
1978年 体育研究室室長
1998年 定年退職

【競技歴】

1960年 ローマオリンピック大会 団体総合優勝, 鞍馬3位, 個人総合4位
1961年 全米選手権大会 (ダラステキサス) 鞍馬優勝
1962年 プラハ世界選手権大会 団体優勝, 個人総合4位
1964年 東京オリンピック大会 団体優勝, 個人総合・鞍馬・平行棒2位
1966年 ドルトムント世界選手権大会 団体優勝, 個人総合2位
1967年 スイス・モントルー 100周年記念大会 個人総合優勝

本稿は「研究プロジェクト：日体大とオリンピックの関わり」の一環として実施した。メダリストへのインタビューをもとに構成されている。

本インタビューは、平成29年7月24日(月)に岸記念体育館にて鶴見修治氏にお話を伺ったものである。

1. 競技との出会い

鶴見氏は、浅草生まれ、戦時中に両親の出身地である静岡県引佐郡東浜名村(現在、浜松市北区三ヶ日町)へ疎開。都筑小学校にて児童期を過ごした。

小学生の時は特に体操をやっていたわけでもなく、野球、陸上競技(マラソン、駅伝)、水泳をやっていた。また、運動・スポーツ以外にも焚薪や枯

れ木を取りに行ったり、それから船で、ろを漕いだり、魚を釣ったりと、自由に体を動かす機会に恵まれていた。鶴見氏は7人兄弟の第4子の次男として生まれ、年の差が離れた兄弟構成の中で育ったことや、“多様な世代とのかかわり”のなかで成長することが重要であると話す。さらに、後に体操競技をはじめるきっかけとなる竹本先生との出会いも重要であるが、多種目のスポーツを経験することや遊ぶことが重要であると伝えてい

るように、「鉄棒」という遊びの経験から、鶴見氏いわく、「遊ぶことが得意だった」という表現している。

小学校6年のときには引佐郡の野球の大会で優勝したのよ。そのとき僕はサードをやってたんだよ。だからその頃に教えてくれた先生っていうのがまあ、軍隊から帰ってきて、もう先生たちもやるし。今、考えるとそれが良かったんじゃないかなと思うね。

僕はその他に体操なんかやる。田舎で鉄棒やなんかでも砂場の上でぐるぐる大車輪だとか、蹴上がりなんてあんな難しいことでもほら、体小さいんで、自分の体コントロールすることはできたからね、何が得意かっていうと、まあ遊んでるのが得意だったただけだからさ。

中学校は練馬区の豊玉中学校へ通い、軟式テニス部に入部。3年生の時は練馬区の軟式テニスの大会で優勝した。しかし、同時に野球部にも所属していた。このように、中学生になっても多種目のスポーツをこなしていた。

高校は國學院高校へ進学。入学して1年間は何もなかったが、1年生のときに日本体育大学（以下、日体大と表記）の竹本正男先生や上迫忠夫先生、河野昭先生など、オリンピックへ出場する日体大の先生たちが運動会に模範演技のため来校。屋外で実演をした。これを見た鶴見氏は体操競技に魅了されていった。また、当時、日体大体操競技部のキャプテンの、佐々木孝平氏が國學院高校の体育の先生として赴任した。佐々木氏は鶴見氏の恩師でもあり、メルボルンオリンピックの強化選手でもあった。けがをしなければ、本来ならばオリンピックに出場していた選手であった、と鶴見氏は振り返る。週末に日体大で練習をするときには佐々木先生が帯同し、日体大の体操部員およそ400人とともに練習をさせてもらった。

高校2年生のとき、國學院高校に体操部が創部されたが、1年間はまったく試合に出なかった。

3年生の時に、東京都高校選手権で優勝¹⁾、さらに、インターハイ、国体出場を果たす。国体参加については以下のような話がある。

神奈川の国体に行ったんですよ。で、国体行ったときには、あの、平沼高校で体操の試合をした。それも屋外でやったんだから、試合を。体育館じゃないんだ。だから、たまたま運よく俺はあんまりけがもしなかったし、けがする前にもう嫌だったら体操やめて遊びに行ってたからさ

と冗談交じりに話していた鶴見氏であるが、幼少期から“遊ぶことが得意”と話をしていたように、この“遊ぶこと”に鶴見氏自身の体操に対する考え方を垣間見ることができるのではないだろうか。

高校卒業後は、複数の大学から勧誘されたが、恩師の母校であり、練習をさせてもらったりと、お世話になっていたこともあり、日体大入学を決めるに至った。

2. 日体大の思い出（選手生活の思い出）

日体大の思い出についてまずは、次の言葉を取り上げておく。

僕もいろんなことさしてもらったし、することに対してはやっぱりね、何て言うか、お金があるんだとか、いい悪いだとかじゃなくて、自分の何て言うのかな、気持ちをコントロールできる、そういうことをやっぱり体操やってから、まあ遊んでる中でいろんなことを経験さしてもらったことはね、うん、良かったなと思ったりしてるんですよね。ありがたかったことには普通、東京都の出身の人っていうのは、寮やなんかは入れないんだよね。どういようなことか分かんないけども寮に入った。

体操競技に出会うまでは“遊ぶこと”が体操に

にとって重要であったことやいろいろな運動やスポーツを通して体操に通ずるものを感じていた幼少期、中学、高校を過ごしてきたようであるが、大学では体操を“遊び”と置き換えて認識している点は鶴見氏と体操について考えるうえで、重要な視点ではないだろうか。しかし、決してそのことが楽しい思い出を意味しているわけではなかった。

本当もう偉い先生ばかりでしょう。寮なんか行ったってもう、どろんどろんになってきてさ、どろんどろんの後に風呂の中入れられるのがつらくてさ、麦飯でさ、嫌でさ。俺も、そう言っちゃ何だけどわがままだったからさ、大変だった。それで外の寮、桜新町の外の寮へ体操部の、要するに、まあトップの選手っていうかな、そういう人たちが外寮と言ってさ、内寮じゃなくて外に寮造ったんですよ。そこへもう入ってね。

日体大での思い出として次に挙げられることは幼少期の思い出としても挙げられていた“多世代、多様な人とののかかわりの大切さ”ではないだろうか。

外やなんかでは砂場みたいな所、外で練習するわけ。そうすると体育館の中っていうのは順番だからもう時間決まってる。もう10班ぐらいが体操部でも順番にいろんなこう、なんか通学生の人とほら、夜遅くまで練習やるのと、みんな違う。体育館で練習できることと、外でやれることとみんな違うでしょう。通学生の方は大変なんだよ、ずっと来てさ。ほんでもう練習をするって、それからまた帰るわけでしょう。その周りで下宿をしている人もいるしさ。お金がなきゃ、そりゃもう大変なスポーツなんかできないんだよ。やっぱり仕送り、みんなされて、寮でもあるでしょう。もっと仕送りされるって先輩がいればさ、先輩なんかもみんな新生が入ってくるときには全部布団だとかいろんなものをさ、みんな上級生があれ

して、われわれはもう押し入れの中で寝てんだから、こうやって。そんなような時代。だから今のトップクラスの人と、われわれ、あれしても、雲泥の差だから。お金があるわけでも何でもないんだけど、みんなもう本当にね、体操の虫というか、いろいろもう、ただありがたかったことには、竹本先生にしても、先生やっていながら、学生を教えながら一緒に練習してたから。だからそういうのずっと見てたからね。だから竹本先生なんかは僕らと20歳ぐらい違うんだよ。戦争にも行ってきてるしさ。体操の神さと言われるような人だけだね。その先生に俺はずっともう付いてたっていうか、一緒にいたから。山下先生だとかさ、まあ、相原先生もそうだ。相原先生は、まあその後、だから体操部もほら、学生、いろんなあれの関係があったから。寮でも寮生を管理、見る人とか、東京出身で寮監やったのは、僕だけぐらいかも分かんないね。たまたま僕が大学にいるときに寮監やってたから、気は楽になるかも分かんないが、卒業して、あの頃はね、清原先生はもともと水球なんかもやってたんだよね。よく知ってるよ、俺は。あの時代にはたくさんいたんだ、卒業生。剣道の人もいたりとかさ、陸上いたり。それで、だからもうあっちこっち話は飛ぶんじゃないんだけど、思い出がたくさんある。それが僕はすごく良かったっていうのは、それと全国からほら、学生が来てるでしょう。現役のときはまあある程度、こういうふうには試合はやってたりして、当時は体操なんかは東京教育大学と日本体育大学の定期戦やなんかがあったの。すると、東京教育大学の（今の筑波）歌も歌わされたりしたんだ当時の東京教育大学は、あそこの初台って言ってさ、あそこにあったの。今の筑波のほう行ってる。筑波のほうの先生たちなんかは、俺はよく知ってる。それから当時は早稲田、慶応、立教、明治、いろんな大学っていうか、だからその中でもやっぱり慶応、早稲田系列、慶応系列、東大、東大へ行った人たちもたくさんいるよね、結構。なんかそういう人たちと割合にこういうふうにいるね、体育大

学にいたんだけど、まあ知り合いではないけど、
会う機会があったりしてたから。

以上のように、鶴見氏の言葉から一貫して“遊ぶこと”と“多くの人とかかわること”を読み取ることができる。そして、けがをしてまで体操の練習はしない、と冗談で話していた鶴見氏だが、まったくけがをしなかったわけでもない。

けがする前にもうやめてるから、練習。いや、それは冗談。本当にね、大学の頃にアキレス腱切った人なんか、結構いるんだよ。それから僕らのときには、もう、僕らも難しい技をたくさんやって、開発、それこそウルトラCじゃないけどさ、そういうことやったことある。だけど僕は、やっぱり命を懸けてまでも、まあ命を懸けるとかじゃないんだけど、やっぱりね、何て言うか、好きなことやっててさ、なんかスポーツをやっててけがをするまでスポーツをすることは無いと思ってるからさ、自分としては、こんなこと言っちゃ駄目。ま、そういうようなことで育ててもらったからそう思ってるのか分かんないけど。そりゃ大変だよ、けがをしてそれを回復して進めていくなんて、だからけがもしてますよ、もちろんね。してるけれども、僕もけがで一番つらかったのは、東京オリンピックの前にアキレス腱切ったって言われたのよ。長野県菅平の文部省の研究所、そこで練習中、けがしたの、僕は、合宿やってるときに、それが東京オリンピックの年、1964年。僕は菅平からアキレス腱をやったんじゃないかっていうんで、タクシー呼んで、タクシーで菅平関東労災病院まで、関東労災病院の水町先生、それから大和先生、院長先生にも診てもらってそしたらアキレス腱切れてないと、その上のヒラメ筋のところ、要するに断裂っていうかそしたらもう、ちょうどまだ大学にいる頃だからね、当時の学長、栗本義彦学長がお見舞に、1万円かなんか、1万円っていったら大変なんだよ、院長先生に「先生、もう帰っていいですか」って、言ったら「鶴見君、せっかく来

たんだから一晩ぐらい泊まってけ」って言われてましてね。それで寿司を買ってもらい学生と一緒に食べた。そんなような時代だったの。

それで仙台のほうへ合宿に、オリンピックの前に行ったときは、ほとんど練習してないんだ。だけど一応、治りそうだっていうんで、合宿やってりして。まあ運よく治って、オリンピックは出たんだけどね。それは大きいほうのけがだね。その前のけがってあんまり。俺、医者行くの嫌だからね。けどもやっぱり専門家の先生の、要するに、ま、いいか悪いか分かんないけど、その人が大丈夫だって言われたら、大丈夫。簡単なんだよね、大丈夫だって、どうか分かんないけど。今、それが一番いけないって言ってるわけだ。痛いとかかゆいとか、自分で分からないと。

大学4年生の時はモスクワにおける世界学生選手権（現在のユニバーシアード）に出場し、旧ソ連のチトフ選手に次いで個人総合2位という成績をあげた²⁾。しかし、旅費交通費を捻出するには骨が折れたそうである。個人負担が約60万円。当時の日体大の初任給がおよそ6,800円だった。そこで当時後援会つくってもらったり、各同窓の所で模範演技を行って、お金を寄付してもらい、ようやく参加できる状況であった。

日体大助手、専任講師として着任してからも、鶴見氏の“多世代、多様な人とかかわり”を確認することができる。

僕はいい環境とは言わないけど、自由に、まあ、「何だあいつは」って言ってる人もいたか分かんないけど、自分そんなことよりいろんな人、だからサーカスを見に、まあ竹本先生とサーカスね、ポリショイやら結構見ましたよ。自由というか、やっぱりそうはしたいと思っても、僕らも人間だからさ、町に遊びに行きたいしさ、ね。だから僕が練習はまあ、みんな終わってから、まあそれは先生になってからだけど、ほとんどもう大学の事務局やなんかだとかね、宿直室やなんかとか、寮

監やったりして、それで、もうただ寝るだけで学生がいくらでもいるんだけど、練習をまあ7時から8時頃終わるわけ。それまでみんな待っててくれるわけよ。それからタクシーでばーっと渋谷へ来てさ。僕はやっぱり大学に残ってる教員の一緒に連中とかね。一番よく行ったのはね、相撲の塔尾先生とかね。

次に挙げられるのは“工夫をすること”の重要性ではないだろうか。専任講師として大学に籍を置き、ローマオリンピック、東京オリンピックと活躍していく。なかでもウルトラCの「鉄棒のキリモミ下り」を披露するなど日本男子団体優勝のポイントゲッター的役割を果たし、個人総合でも2位になった³⁾。

ウルトラCっていうのはね、東京オリンピックの前にね、合宿をやったんですよ、高知で。その当時はもう全国各地で合宿やってたから。高知県でやったの。そのときにね、メディアを呼んで、それで発表したの。あの、難しい技を。それでそのときに、何て言うか、カメラがなかなか、報道の連中が来て、映した。そのときは山下君の山下跳びって、ひねりだとか、あの、新・山下跳びってね。山下跳びをやって、それでひねるようなこと、あるいは鉄棒だと、まあ、あの、「キリモミ下り」だとか何とか言って、鉄棒の上でこうやってひねってやるんだとか、あのときは新しい種目をA、B、Cって三つの難度の段階しかなかったんだよね。それからD難度とかE難度とか、それで、だからウルトラCっていうのは、ウルトラって超っていうのかな、Cの、C種目、難しい種目の中でも、それよりもっと難しいっていうんで、どういう名前を付けようかなんて言っているいろいろなんか、そのいきさつは分かんないけど、たまたま僕は、ウルトラCって言われる「キリモミ下り」っていうのかな、それを僕がだいぶやったの。

この「鉄棒のキリモミ下り」の習得もまた、“遊び”の中から生まれる。

トランポリンからこう、あれしたりとかね。ひねり技だとかね。いろんなことやってた。ところが、それは、要するになんか練習してる中でみんなが、遊びながらじゃない、練習の中でさ、もう得意な人もいたり、いろいろして、たまたま練習のところ、こういうふうにやってるわけじゃないから、それで僕はちょうど鉄棒で、東京オリンピックのときに失敗しちゃったのよ。あ、失敗って鉄棒で。そのとき種目別の選手権、出れなかった。遠藤さんもその練習やってた。彼が鉄棒できりもみっていうかな、そういうのをやったんだけどさ。今はもういろんな跳び方はね、ウルトラCといわれたりっていうけど、いろんな人がいろんな種目でやってたの。鞍馬の得意な人だとかさ。

ここでも“工夫をすること”を確認できる。たとえば、

8ミリの映画見ながら、これみんなで酒飲みながらこう、見てたりとかね。映像なんかも見たり。いろんなことつくったんだよ。深川木場なんかで材木屋あるでしょう。昔は砂場だとか、それでどうも砂よりも木くずがね、いいじゃないかって。俺の友達がちょうど木場のほうにいたもんだから、トラックでグラウンドへかんなくずを持ってきて。それ敷いて、そうするとあれ結構柔らかいから。ところが外だから雨が降ったりするともう臭くなったりさ、それを替え合ったりさ。いろんなことやったよ。

その他にも、日常生活場面では、「電車のつり革。あそこはつり革でどれぐらいこういうふうにはぶら下がつてられるかとかさ。つま先でぐーんとどれぐらい立っているか」普段から体操に役立てていた。

3. 東京オリンピックのメダル獲得

ここでは、東京オリンピックに至る経緯として、ローマオリンピックについて取り上げる。まずは、イタリア消防学校で“秘密合宿”を実施したことである。

代表は8月10日夜、羽田発スカンジナビア航空機で、アンカレッジを経由してコペンハーゲンへ出発した。機内、そして、経由地のアンカレッジでも練習する張り切りようであった⁴⁾。翌日11日午後に目的地のローマに到着。体操競技選手以外は選手村に入村したが、体操競技選手はローマ・キャンピーノ空港から10分ほどのカパニエルにある中央消防学校合宿所に向かった。ここで23日までの12日間“秘密合宿”を実施した⁵⁾。その時の様子を鶴見氏は次のように回想する。

ローマのオリンピックのときに、なんとしてもソ連を負かさなきゃいけないって。ローマオリンピックの前に、消防学校で合宿練習したいということ、ローマに行ってから、オリンピック村に入らずに、消防学校で何日間か練習したの。消防学校からね、あの一、イタリアの選手たちが、そこで練習したりしてたの。竹本先生、なんとしてもソ連を負かさなきゃいけない。もう、日本、ね、あの一、いつも2番になっている。イタリアにしても、もう、ソ連をもう負かすのは日本しかないってような感じで、イタリアの人たちも消防学校で僕らが合宿やっていること知ってるから、みんなね、応援してくれたんだよ。イタリアの人たちが。

この前年、モスクワで世界学生選手権(ユニバーシアード)があり、その帰りに、近藤監督がローマを訪れて、話を取り付けていた⁶⁾。上述されているように、消防学校では千数百人の学生がいろいろな形でサポートをしたり、消防学校の体育館でリハーサルを兼ねて実演会をやったときには、およそ1500人が声援してくれたほどであった。

結果は団体総合優勝、鞍馬3位、個人総合4位であった。鶴見氏の活躍の様子は『金メダルの王者の百年史 体操日本栄光の物語』に示されているように、鶴見氏が演技台に上がると、「鶴見、鶴見！」の声が観客席からかかったり、「流れるような技さばき」や、チームの中でも一番陽気な鶴見氏が「腕で顔をおおって泣き出した」と描かれている⁷⁾。

以上のように、東京オリンピックについて語るには前回大会のローマオリンピックにおける日本と旧ソ連とのライバル対決について説明をする必要があった。そして、彼らは次の目標、東京オリンピックに向けてすぐに始動することとなる。

試合が終わってから1カ月間、次の東京オリンピックの強化練習だって言って、ヨーロッパ1カ月回ったの。東京オリンピックの強化合宿は国立競技場のスポーツマンホテルに宿泊していた。銀座の日比谷松本楼食堂があったりしてさ、そこを、もう定宿ぐらいにして、それから全国へ行った。岩手か東北も行ったし、それこそ四国行ったり、九州行ったりとかね。体育館新設のこけら落としだとか、そういう所に招待されて。

勝って当たり前前の東京オリンピック。東京オリンピックがいかに彼らにプレッシャーを与えたか、以下に鶴見氏のインタビューを取り上げる。

僕はね、東京に関してはね、負けるとは思わなかったのね。もう自分たちが、ただ、何ていうのかな、地元でやるから、いろんな人が応援してくれるわけじゃない。もう、頑張れよ、とかさ。で、頑張っていないわけじゃないんだけど、それよりももう、自分のしたいようにさせてくれって言うたくなるときもあったぐらいだけど。普段の練習から、試技順だとかさ。だからあんまり知ってる所でね、いろんなことをやるっていうのはね、つらいよ。うーん、逆に。うん。ましてや判定競技になったら。勝って当たり前じゃん。東京オリ

ピックのときにはもうね、勝って当たり前っていうような感じっていうかね。僕はよく言われるんだよね。「試合におまえ強い」って。ローマのときは、何ていうのかな、自分の力が分かる。長所もあったりするし欠点もあったりするんだけど、一応ね、減点法だったから、大体中間点のぐらいのほうだったんだけどね。だけど、そうねえ、まあ、なーんていうのかな、どっちの大会でも大変だったことには大変だったね。当時はね、ローマのときはね、自分が失敗したらやり直しが利いたんだよ。手を挙げて、それで、ちょっと終わってから金子チームリーダーを見ると、やり直す合図があるから、手挙げて、やり直しが利いたの。だから、やり直して失敗する人もいたしね。それから、前の良かったんだけど「まだいける」って言ってやった人もいるし。

こうして長く続いたソ連体操競技メダル独占の時代が終焉し、日本の時代へと幕が明け、鶴見氏が活躍したこの時期は“体操ニッポン”の黄金期と呼ばれてきたが、その内実は一筋縄で説明できるほど簡単なことではなかった。東京大会の結果は団体優勝、個人総合・鞍馬・平行棒2位と好成績を残すことになった。

4. その後の人生

「東京のときがもう、ピークだったね。もうちょっとやりたかった。まあ、やりゃあやれたんだけど、ほら子どももいたり、仕事も変わったりとかいろいろあったからね。東京オリンピックの後、2年後に世界選手権があったんですけど、その前にたまたまね、僕は河合楽器のほうに勤めた。」

以下では、東京オリンピック後の鶴見氏の体操競技人生に触れてみたい。

東京オリンピック2年後の1966年9月に第16回世界選手権大会がドイツのドルトムントで開催された。東京オリンピックにおける体操競技選手

団の活躍は広く知られている。しかし、それを上回る活躍をみせた大会がドルトムント世界選手権大会であった。17個のメダルを獲得した。鶴見氏は団体の優勝を果たし、個人総合では2位となったが、種目別のつり輪で肩を痛める。「種目別では全部残った。そしたらあんまり体力ないものだから、つり輪で肩痛めちゃったの。それで、6人で決勝の種目やるんだけど、要するに僕がつり輪で失敗したもんだから、後の種目は、僕は全部0点」となった。

世界選手権大会の前8月に河合楽器に入社し、体操競技を続けた。

そこにもう監督もいたり、体操部もあったりしたんですけど、会社の中には体育館がなかったの、高校の体育館借りてみんな練習した。まあ大した先生じゃないんだけど、みんなが「先生、先生」って言うわけだね。体育大学を卒業した連中もいるし、浜松行っても知ってる人たくさんいるし。河合楽器は都市対抗野球とかスポーツに大変熱心な会社だって聞いてた。河合滋社長は体操に理解があり体操クラブをつくらうって、それで地元の人たち、子どもたち集めてさ、カワイ体育教室っていう教室を開いた。カワイ体育教室っていうのを全国に広めるための仕事をしたわけ。カワイ音楽教室と協力して、ボウリング場の後、教室みたいなのがついたりとかさ。音楽教室なんてどこでもできるわけだよ。音を防音すればさ。それで研究室を等々力に置いといてさ、河合滋社長は全日本社会人体操競技連盟の会長なんだけど。陸軍士官学校出身。そのときもう本当にね、僕らを応援してくれてさ。当時は会社でチームを持てるところっていうのはあんまなかったんだよ。だから僕が行ってから組織を作ったりさ、フランスからナショナルチームを呼んできたりとかさ、それから中日カップ、中日新聞にお願いしたりとかさ、いろいろ。ありました。

鶴見氏自身が“東京オリンピックがピーク”だったと話しているように、ドルトムント世界選手権大会のけがもあり、河合楽器入社後、引退を考えたこともあったようである。しかし、監督を兼ねながら、プレーヤーとして競技を続けることになる。翌年、1967年にスイスはモントルーにおいて100周年記念大会に招待され、個人優勝を果たした。それを契機に選手としての終止符を打つことになった。

5. 後輩に一言

多くを語ってくれた鶴見氏のインタビュー。後進に伝えたいこと、それは“競技を越えた日体大出身者同士の絆”ということではないだろうか。

大学で何かあるときに、OB会じゃないけれども、やっぱりね、僕らを支えてくれた同僚もいるし、支えてくれたっていうか、一緒にやった。だから、そういう会がいろんな形で全国でクラブ、OB会というか同窓会とか、いろんなことしてると思うんだけど、それも毎年、毎年のことじゃないだろうけど、ぜひね。だから、北島君かな、水泳の。彼は、平泳ぎ。体育大学でメダル取った人、こういうので残してくれることを非常にね、ありがたく思ってるんですけどね。できる限り、少しでも思ってるんだけど、いろんな新聞の記事の切り抜きとかそういうのあるですよ。こういうような収集家の人が、同志のほうから手紙が来たりね、それを僕がコピーして残したりしたんだけど、それから今は、ユーチューブやいろんなものがあるけれども、そういうのはやっぱり本もそうだしなんかいろんな形でね、原本じゃないけど、だから特に今竹本先生の、竹本先生のことはいくらいろいろと教えてもらったっていうか、まああんまり多くを語る人じゃなかったけども、だから、だからもうやっぱりね、体操の神様といわれたような人だから、ちょっと違うんだよ、われわれとね。やっぱりそういうような、こう、

話し合いだとか、会話することとか、そういうことってあんまりないから。しっかりした絆とかさ、つくってってもらう。それはやっぱりどこかでしっかりとね。

以上の鶴見氏の言葉には、今回のインタビューを含め、さまざまな形で後進に役立つ“無形のレガシー”としての重要性を指摘できるのではないだろうか。絆を深め、後進のため、同窓のために協力する。最後に以下の文章にも表されているので示しておく。

苦しいときは誰だって苦しいんだし、苦しいことを言えば切りがないし、他の人に見せられない。自分でこういうふうに針で縫ったんだから。こうやって自分で。そのぐらいマメができちゃって。薬屋なんかでもさ、ドイツの薬はこれがいいとかさ。だからそういう点では、僕はやっぱりいろんなジャンルの人の、やっぱり力を今、ね、借りなきゃいけないし、もっとそれに戻さなきゃいけないというふうに思うんですよ。これが50年100年じゃないんだろうけど、まあやっぱり誇りに思ってる。失敗するかどうかは分かんないし、いろんな人の力でできる場合もあるし、自分たちで作るものもあるだろうけど、そういうものがしっかりと残ってね、いくようになってもらえばありがたいなと思っています。

引用文献

- 1) 財団法人日体スワロー編集／日本体操協会監修（1978）体操競技写真大鑑，中日スポーツ研究会，p.410
- 2) 財団法人日体スワロー編集，同上書，p.410
- 3) 財団法人日体スワロー編集，同上書，p.410
- 4) 小野泰男編著／財団法人日本体操協会監修（1972）金メダルの王者の百年史 体操日本栄光の物語，キネマ旬報社，p.193

- 5) 小野泰男編著, 同上書, p.194
- 6) 小野泰男編著, 同上書, p.194
- 7) 小野泰男編著, 同上書, pp.198-205

